

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	3370106456		
法人名	株式会社さつき		
事業所名	グループホーム みらい(2Fユニット)		
所在地	岡山市南区妹尾883-1		
自己評価作成日	平成25年12月16日	評価結果市町村受理日	

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaiyokensaku.jp/33/index.php?action_kouhyou_detail_2013_022_kihon=true&JigyosyoCd=3370106456-00&PrefCd=33&VersionCd=022
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 ライフサポート
所在地	岡山市北区南方2丁目13-1 県総合福祉・ボランティア・NPO・会館
訪問調査日	平成26年1月28日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

・毎年アピールしたい点の1つに挙げているが、みらいの近くには、スーパーが何件もあり生活には便利な場所に位置しているため、毎日買い物に出かけ、新鮮な食事の提供ができています。・GH同士の交流を数年前から行っており、近隣GHと合同で毎年行っている利用者作品展は今年はテーマを統一したのも展示でき、まとまりのあるものとなった。また、近隣のGHだけでなく交流の輪は広がり職員の施設実習等に生かすことができています。・保育園児の訪問や中学生ボランティアなど地域の子供たちとの交流はあったが、今年は小学生との交流も実現でき、利用者様にとってとても有意義な時間を過ごすことができた。民生委員さんの協力で実現可能となっている。・簡単な内容ではあるがご家族へのアンケートも実施でき今後も続けていきたい。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

数年前から始めた近隣のグループホームとの管理者交流会は、現在では6施設の参加があり、2ヶ月に1回開催している。職員間の実習ではAホームから2名の職員、「グループホームみらい」からBホームへ2名の職員が行く等、活発な相互交流がある。他ホームでの体験はケアの工夫やヒントも得られ、日々の業務に活かせるメリットもある。又、職員の意欲向上にもつながっている。今年7月で丸10年を迎えるこのホームは2ユニット18人の利用者に対して、職員数は20人。人員確保が厳しいグループホームもある中で、日中の職員配置4人以上の日もあり、ゆとりのある体制は素晴らしい。利用者一人ひとりとじっくり向き合い、質の高いケアを目指すホームの姿勢が見えるようだ。又、地域の委員の協力や、町内会、民生委員とも「絆」が生まれつつあり、地域に開かれたホームとして着実に歩んでいる。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、活き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	3つの理念は事業所の見えやすいところに掲示している。地域に開かれたホームとしては小学生との交流を始めて行い、楽しむだけでなく施設の説明や見学をしてもらうことで小学生から色々な質問が出た。	近隣の他施設との情報交換、職員研修等、交流会を実施したり、公民館で3施設合同利用者作品展を開催する等、地域に開かれたホームとしての存在も浸透し、地域住民との交流も深めている。理念は事務所に掲示し職員間で共有、実践している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	1部の利用者は自宅で生活していた頃からの地域のサロンに毎月通っている。地域の催事にもよく出かけている。昨年度より町内会に入り、資源ゴミの当番や町内会総会、地域の防災訓練などに出向いた。	町内会に入会した事で、回覧板から諸々の情報も入り、公民館主催「いざという時の1日防災キャンプ」に参加した。妹尾小学校4年生、妹尾幼稚園児との交流や音楽発表会の予行演習の見学、公民館展覧見学等、地域との交流も幅広い。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域で開催される桜祭りでは、毎年近隣のグループホームと共同で、出店をし、グループホームの紹介や認知症についてのパンフレットを配ったりしている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	みらい新聞を町内の回覧版で見てもらえるかどうか？機能しない意見箱についてどうするか？等について助言をいただき、また、会議から出た意見から、重要事項説明書の内容を一部追加する等、活かすことができた。	外部評価当日に開催された運営推進会議にライブサポートも出席させてもらった。議題の中では「重度化や終末期に向けたホームの方針について」の話し合いをする等、職員、家族、地域住民等、参加者は情報交換や活発な意見交換をしていた。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	運営推進会議は、包括支援センター職員が出席される。10月から介護相談員の訪問が開始、利用者との話の他、事業所の状況など伝えている。事業者指導課には運営等で分からない時のみの連絡になっている。	市の介護保険課から月1回、介護相談員を派遣してもらっている。毎回とまではいかないが、運営推進会議に地域包括支援センター職員の参加があり、その都度、情報交換、助言等を仰ぎ、良好な協力関係が築けている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	外部研修や内部の勉強会等で学ぶ機会を持った。施錠しておらず、施設から一人で出てしまった利用者もあったことから、「施設外徘徊対応マニュアル」を新しく作成した。	今は家族の同意が必要であるような「身体拘束に該当する人」はいない。5月に利用者が離苑した事があり、職員の情報共有を図り、徘徊対応のマニュアルを作成した。日頃から身体拘束に関する研修等を通して職員間で周知徹底している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見逃されることがないように注意を払い、防止に努めている	管理者、職員は虐待防止について外部研修または内部の勉強会で学ぶ機会を持ち、虐待防止責任者を配置した。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	今年初めて、キャリア形成訪問指導事業を利用し、講師をよんで成年後見制度について学ぶ機会を持った		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居にあたり、契約書・重要事項説明書等の内容を理解して頂いた上で締結にあっている		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	みらい新聞を町内に回覧するかどうか？についてご家族は、運営推進会議や個別での会話で意見を下さった。家族から職員の顔と名前がわかるようにとの要望あり衣服に名前を着けた。アンケートも実施	運営推進会議や避難訓練、敬老会、七夕の集い等のイベントには多数の家族の参加があり、家族間の交流や話し合う機会も多い。職員は2ヶ月毎に利用者家族へ手紙を書き近況報告をしている。また、家族アンケートを実施し、ホームへの要望等を運営に反映させている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	代表者とは年2回面談する機会を設けている。管理者は毎月の会議または、面談の機会を設けて意見を聞き出せるようにしている。	毎月のスタッフ会議で研修をしたり、行事計画、個別ケアカンファレンス等、意見や提案を話し合っている。代表者との年2回の面談も恒例となっており、日中の職員の配置人数や介護福祉士・介護支援専門員の有資格者の数も他のホームより充実している。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	面談で出た意見で可能なものについては、実行に移してもらっている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	内部研修はすべての職員に、外部研修は、職員の力量等を把握し必要と思われる内容のものを個々の職員に受ける機会を確保している		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	管理者は2ヶ月に1回、地域のGH管理者と情報交換の場を作り、職員も他のGHへ毎年施設実習に出かけられるように取り組んでいる。職員も訪問できる施設が増えた。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	新しい利用者、職員は丁寧に挨拶、自己紹介をし、本人と会話できる時間を作るようにしている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	サービス開始前に数回、ご家族とは面談や電話でお話を聞き、ご家族の思いなどを聞くようにしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	相談時に本人・家族の思いをよく聞きとる。本人の様子がよくわかるように、相談時の段階で利用者と共に過ごす時間を設け観察を行っている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	家事や作業など一緒に行っている。寿司や赤飯等昔からの料理は、教えてもらうこともある。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	2ヶ月に一度の手紙や年4回の新聞で利用者の様子を知ってもらい、電話や面会時に気になることなど報告をしている。家族交流会は年に3回開き、家族にお手伝い等依頼し、共に楽しく過ごしてもらっている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	帰宅の要望のある人に対しては可能な限り要望に応じている。面会は家族のみならず、親戚や知人も訪れている。公民館で習い事をしていただいていた利用者は公民館ボランティアの訪問を喜んでいただいていた。	大正琴のボランティアの訪問時、昔の仲間と再会し、自分もまた練習してみようという気持ちになった人もいる。在宅時から行っていた地域のサロン会に、引き続き毎週参加している人もいる。職員は利用者の馴染みの場所や関係継続の支援をしている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	気の合う利用者同士が傍の席になるように工夫している。レクレーションの時間などでは皆が関わりを持てるように心がけている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	契約終了後も連絡を取っている。利用者の様子を聞いたり、利用者または家族が来てくれることもある。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	帰宅、または外出を望まれる利用者には、ホームだけの対応でなく、ご家族の協力も得ている。食事に関しては、パンのいい人、うどんの嫌いな人、辛い物は食べない人それぞれの好みに対応している。	「時々家に帰り家の用事がしたい」と言う人には、自宅への外出支援をし、新聞を読むのが習慣だった人には愛読していた新聞の購読を支援している。職員は利用者一人ひとりの日々の言葉や行動からも本人の気持ちを察知し、思いの把握に努めている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居前の面談や事業所からの情報提供、入居後に得た情報を職員間で共有している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	心身の状態は、朝の申し送り時に夜、朝の様子を、夕の申し送り時に日中の様子を職員に報告し、気になることは申し送りノートに記載。会議等の時間にも利用者について話し合っている		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	カンファレンスには、ご家族にも出席してもらうように心がけている。訪問看護、担当医の意見も聞きながらプランを作成している。	介護記録の「気づき、寄り添い」項目から把握した個々の訴えや思いを職員間で共有している。サービス担当者会議には家族の参加もあり、計画作成担当者、職員共々、利用者がその人らしく生活していく為のプラン作りを検討している。	「その人が一番喜ぶことは何か？」を見出し、本人の思いを反映するような具体的な意向や希望を介護計画に書き、目標を設定してみるのもよい。シンプルな方向性が見えてくるかもしれない。
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	朝の申し送り時にケアについての情報の共有をしているが、日中の気づきについての記録は、業務に追われ時々忘れていく。ケアの実践ができていくかどうかについては毎日チェックシートを付けている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	自宅に用事がある、という利用者には可能な限り時間調整をし、帰宅の支援を行い、ご家族等にも協力をお願いする。外食・外出を好む利用者にはたいしてご家族の協力も得ながら支援を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	民生委員の協力により、地域の小学校との交流を行うことができた。一クラスずつ3日間の交流が可能となり、新しい遊びや昔懐かしい遊びを一緒に楽しむことができた。生徒たちも高齢者にやさしく接してくれた。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	本人・家族が希望するかかりつけ医を基本としているが、こだわらない場合は協力医に主治医となって頂いている。重度化が進んでいるため、利用者によっては、家族にも職員と同行の協力をしてもらうことはある。	週1回の訪問看護があり、訪問歯科診療を利用している人もいる。1Fと2Fの利用者の状態の差が大きい。必要に応じて家族にも受診の付き添いをお願いしている。また、症状によってはかかりつけ医の往診もあり安心である。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	週1回、訪問看護による健康チェックを行っており、1週間に起きたこと、気になることを看護師に伝えている。看護師から気になる点があれば、助言をもらい、主治医に連絡をしてもらうこともある。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時には、本人の情報を提供し、入院期間中では、病院に行き、本人の様子等を医療関係者から確認している。退院時は、ホームと契約している訪問看護師にも出席してもらい、カンファレンスを行っている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	本人・家族の意向については、本人の状態の変化のつど確認している。重度化したり、あるいは身体の急激な変化が見られる場合は、医師や訪問看護を交え家族と話し合い、今後の支援内容等を確認してもらうために「生活支援に関する覚書」を作成する。	今年度は1Fは2名、2Fは1名の看取りをした。運営推進会議で「重度化や終末期のあり方」について今後のホームの方針等を話し合っている。「看取り・重度化に関する意向確認書」「看取り介護についての同意書」等で本人・家族にも説明、同意をもらうようにしている。	ターミナルに関する「意向確認書」も勿論大切だが、関係書類の中に「医師の所見書」もつけておいた方が良いのではないかなと思う。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	年2回、看護師の指導のもと訓練を行っている。緊急対応マニュアルを作成し、目のつく所に貼っている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回の避難訓練を行い、今年は津波対応1回、夜間火災対応を1回行った。火災の避難訓練は1回だけでは、上手く対応ができていなかった。地域で開催される、防災訓練には積極的に参加した。	家族、地域住民が参加して消防署員立会いのもと避難訓練を実施した。「おんぶひも」の使い方や手作りの「布たんか」等を使って移動の訓練もした。参加した地域の人からは「緊急通報装置について」の意見や「2Fから1Fに降りるのに滑り台はどうか？」等の提案も出た。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	できるだけ本人の意思を尊重し、傷つけないような言葉かけを行っている。約束事や、日々の予定を知っておいた方がいい人に対しては、間違いが起きないように、ご本人の居室に予定を書いた紙を貼っている。	本人・家族からの聞き取りを基に「人生の歴史」を一人ひとり、作成しているところである。その人が歩んできた歴史や大切にしてきた事を細かく記載しており、職員は思いに寄り添うケアに努めている。個人アルバムも作成中であった。	2Fの利用者の約半数の人の詳細な「人生の歴史」を見せてもらった。利用者の気持ちを具体的に捉えて職員間で共有する記録は素晴らしいと思う。あと半数の人の「人生の歴史」が楽しみです。
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	外出などは希望を聞いている。会話の中で本人の思い等も聞きだし、特に誕生日では、できるだけ本人の要望に応えられるようにしている。家族にケーキを持ってきて欲しい、等もありご家族にも協力してもらった。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	夕食時になると家族の食事を心配し帰宅したがる利用者には、帰宅に付き添い、時々帰宅して用事をしたい、の要望のある利用者には、計画的に帰宅の支援を行う時もある。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	行きつけの美容室でパーマや毛染めを希望する利用者もいるが、認知症や身体の不自由さから美容室の利用困難な利用者には、訪問による美容師に毛染めを依頼し喜んでもらった。お化粧を喜ばれる利用者もいる。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	本人の好みではないメニューについては、内容を変えている。利用者の重度化により座ってできる家事に限られるが、ホットプレートを使うことで、焼きそばやホットケーキ等を一緒に作ることもある。	重症化した人が多いという2Fの利用者も殆んどの人が自分の箸で食事をしていた。「ああ、美味しかった」と完食する人もいる。介助が必要な人は職員が寄り添い、楽しく会話しながら一緒に食事をしていく。おやつ作りや料理の盛り付けを職員と一緒にすることもある。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	体重は月1回測定し、日々の食事については毎回食事量を記録している。利用者の状態に合わせ、食事の形態を工夫したり、食事時間外の軽食の用意や栄養補助食品等も利用し栄養状態の安定に努めている		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎回の食後の口腔ケアを基本としているので、声かけを行っているが、毎回の口腔ケアをして頂けない利用者もいる。殆どの利用者は、週1回または月1回訪問歯科にケアをしてもらっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	日中は介助の必要な利用者であっても、尿意がはっきりしている場合は、布パンツで対応している。自立困難な利用者には、時間をみてトイレ誘導を行っている。	夜は紙パンツでも日中は布パンツにしている人等、一人ひとり、その時々に合わせて柔軟な対応をしている。排泄チェック表で個々の排泄パターンを把握し、声掛け誘導をして、職員は自立に向けた支援をしている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排便の有無の記録をしている。自歩行の困難な利用者が多いため、体操の時間を設けたり、お茶を好まない利用者には好きな飲み物を用意し水分補給に心がけている。訪問看護による滴便や、服薬で調整もある。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	日中の入浴を基本にしているが、利用者の要望で夕食後の入浴の人もある。曜日を決めた方がいい利用者にはそのようにし、入浴の声かけをして拒否があった場合は翌日また声かけをしている。	1Fと2Fの利用者の状態の差はあるが、年齢的なものも含め、曜日や時間は適宜、柔軟に対応している。職員は声掛けやタイミングを図りながら、利用者との会話を楽しみながら支援している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	利用者の中には就寝時明かりをつけたままを好む方もいる。居室で昼寝はないが皆の姿が見えるホールの和室で昼寝をされる利用者もいる		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬の説明書に目を通し、訪問看護時に尋ねたりして確認している。また症状の変化した場合は医師に相談し、訪問看護師から医師に相談して頂くこともある		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	小学生との交流を行い、元気な姿に喜んだり、昔遊びを一緒にして楽しまれた。利用者の中には、敬老会で、昔習っていた詩吟を披露された。敬老会までに何回も練習を積まれた。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	民生委員さんやボランティアの協力により、地域のお祭りや桜や紅葉等季節ごとの外出を行った。初めて、小学校の音楽発表会予行演習を聞きに行くことができた。しかし、利用者の重度化により、介助者の人数が以前より多く必要になり、今後の課題。	家族と一緒に回転寿司へ外食、墓参り、一周忌の法要、散髪、知人宅を訪問、自宅に來客あり帰宅する等、一人ひとりのその日の希望に添って、職員は可能な範囲で外出支援をしている。特に重度化が進んだ2Fの利用者は外出時、全員が車イスが必要となり、職員は2グループに分かれて支援する等、工夫をしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お金は、職員が預かり、保管しているが、利用者により、本人の希望と家族の了解を得て、小銭の入った財布を所持したり、家族と外出に出かける時に、本人の財布を持って出かけることもある。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	利用者の中には家族と電話で話すことで、安心される。定期的に電話や、手紙のやり取りをするように決めてはいないが、要望があればおこなっている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	利用者と職員と共同で、壁に貼る季節の作品に取り組んでいる。花の好きな利用者が多く、季節の花を飾ったりしている。ホール内の温度は一定に保てるように保てるように調節している。	広くゆったりとしたスペースのリビングルームの壁には、3施設合同利用者作品展に「みらい」が担当した四季のテーマ「夏」「秋」の作品が掲示してある。イベント毎の思い出の写真、家族との写真等、見ているだけで寛げる共有空間である。この日もひな祭りに向けての作品作りを利用者と職員と一緒にしていた。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	気の合った利用者同士と一緒に過ごせるように席をとなりにしたり、外の様子がよく見える所にベンチを置くことで、利用者の中には外の様子を見ることが日課になっている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居前に本人、家族とよく話し、慣れ親しんだ家具や家族との写真等、本人が過ごしやすい環境づくりを家族と工夫している。	各居室の入り口に貼ってある家族との大きな思い出写真がとても印象的である。使い慣れた品々やダブルベッドを持ち込んでいる人もいた。個人の趣味や嗜好に合わせた落ち着いた個性あふれる居室になっていた。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	利用者の中には、トイレと他の利用者の居室と区別がつかないこともあり、場所がわかるように大きな文字で貼っている。		